石家莊近在の古蹟（上）

小野勝年

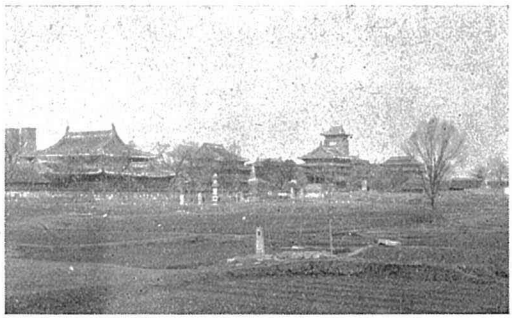
笈底を捜すうちに昭和十三年に試みた石家莊附近の小旅行記を見出した。推敲を經ない覺書程度であつたが、自分にとつてこれが漸く模糊としつゝある思ひ出の種である。實はあの旅は支那に來て以來、一番氣樂な而も愉しいものであつた。其の頃未だ綠も殆んど地表に萠え出ぬ季節ではあつたが、晝は意外に暖く太陽はさん〳〵と黃土を射た。

北支特有な大地と碧空との殺風景な冬眠狀態と評し去ればそれ迄のことではあるが、この單調と見える色彩の中に自然の變化と光の美しさを今更の如く感じ、何處ともなく漂つて來る春の喜びを樂んだ。それは丁度三月初旬で、猶朝夕暖爐をなつかしむ氣溫乍ら、外出には風さえなければ、寒からず暑からず、それに雨降り直後とて、初めの二三日は砂塵にも見舞れずと云つた次第であつた。旅行は數日間に亘つて正定から獲鹿・趙縣等を巡り歩いたのものであつた。實にこれと云ふ特別な目的もなく漫然と歩いた。尤も趙縣の大石橋や獲鹿の本願寺の舍利塔の樣に兼々期待して居たものもない譯ではない。然しそれは治安の關係でどうなることか、其場々々に當つて見なければ豫定は出來ない性質のものであり、從つて漫然として歩くと云ふ形容が尤も適當した旅行と謂ひ得るものであつた。偖て改めて此の覺書を讀み返して見るとそれは餘りにもぎこちなさに滿ちて居る。或るところでは今浮んで來る印象とは似つかない樣な氣持で記されてすら居る。然しそれはそれとして、自分にとつては鷄肋なる儘に少しく訂正を加へ、思ひ決つて發表することゝした。

正　定

第三圖　正定隆興寺

大悲觀世音菩薩と佛香閣

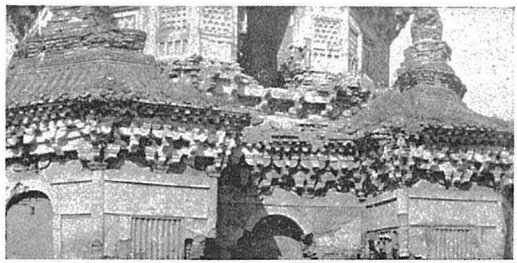


1　2　345　6 78　9

第一圖　正定隆興寺の全景

1天主堂　2摩尼殿　3轉輪藏殿
4金廣惠大師金利塔　5戒壇
6集慶閣　7慈氏閣　8佛香閣
9御書樓

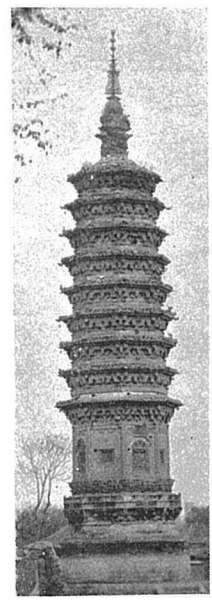
第二圖　正定隆興寺摩尼殿正面



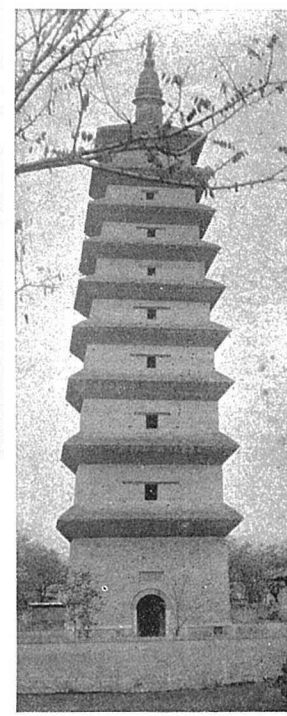
第六圖　正定廣惠寺花塔の建築細部

第四圖
正定天寧寺の木塔

第八圖　正定陽和樓前鐵獅



↑第七圖　正定臨濟寺の青塔



第五圖
正定關元寺の塼塔

↓第九圖　正定縣文廟文成殿

正定は古く眞定と稱して居る。それが正定と現在の樣に書かれたのは清朝になつてからのことである。眞定は漢代以來の古稱なのであるが、それが何故に變更されたのであるか。知見する範圍では清初順治年間には未だ眞定と記して居るから、改稱は恐らくそれ以降のことであらうと考へる。勿論、正と眞とは意味も發音も僅かな相違にしか過ぎない。支那では皇帝の諱を避けて改稱されることが古くから行はれて居るが、此の場合もさうした理由に基くのであらうか。正定に關する府縣志中、清代重版されたものなどを注意すると殊更に眞の字を抹殺したり、或は悉く正の字に改めて居る。是には何か曰くがありそうな氣がしてならないのである。然し今の所、このことは私に解き得ない謎となつて居る。縣名としては清代以來眞定と稱し、それが清朝に正定と改められたものであること上記した通りあるが、更に廣範な區劃名としても、漢の武帝が眞定國を設くるあり、それより以後、魏晉に常山郡、齊周に恒州、隋に恒山郡、唐に恒州或は鎭州、近世以降更に眞定府、眞定路等と稱し、清に至つて縣名同樣正定府となつたのである。

此處は滹沱河に臨み井陘を擁し、古來河北山西間の交通上の要衝であつた。從つて交通上のみならず經濟政治軍事上に於ても亦重要な地方的中心をなして居た。それが固陋な保守主義にたゝられて、正太鐵路の起點たることを拒んだ結果、當時迄名も知られなかつた石家莊に殷盛を奪はれ、それ以來衰退の一路を辿るに至つた。今では落付いた町、物靜かな町と化しつゝある。それはやがて過去の繁昌を語る歴史の町でもある譯だ。されば此處は文化的遺蹟に頗る富んで居る。實は大した期待を掛けずにいつた私ではあつたが、意外な獲物に思はぬ愉快を味ふことが出來たのである。

隆興寺

隆興寺は城の東門内に在る。此邊切つての名刹だ。境内の佛香閣が一段と高くそびえ、遠くからも見える。しかし今では隣りの天主堂の洋式建築にすつかり壓迫された形で、一見如何にも孤影悄然と云つた姿をしめして居

る。（第一圖參照）

寺は一に龍興寺とも書き、俗には大佛寺で通つて居る。隋の開皇六年、刺史の王孝僊なる者が州内の士庶一萬人を勸請して建立したのがそもそもの創めと傳へ、當時は龍藏寺と稱した。降つて宋の太祖趙匡胤が太原親征の歸途、正定に駐輦された。其の際城外の大悲寺に詣でられた。同寺には元來、唐の自覺禪師所鑄と云ふ金銅の觀音菩薩像があつたが、これが遼の兵燹及び周の銅禁とに遇ひ毀損されてしまつて居た。帝はそれを知つて重鑄の旨を仰出された。時に開寶二年（九六八年）で、同四年愈々鑄造に着手することゝなつた。然し場所は大悲寺ではなく、今度は龍藏寺の佛殿の北側に於てであつた。即ち此處に在つた九間の講堂を取除いて仕事場を作り、日日三千人の人夫を使用したと云ふ。龍藏寺が龍興寺となつたのは恐らく其の際であらう。後、龍興寺を隆興寺とも書くやうになつた。龍と隆とは音通するから大した改稱と云ふ程ではないが、勿論勅賜に依つて改めたのである。然しそれは可成後世のことで、清朝の康熙年間であると解せられる。思ふに此の寺院は宋以降歴朝の崇信厚く被護亦尠なからず、寺院佛像の重修や僧舍佛具の增設相次いで行はれた。而も西隣には行宮すら建てられて居る。それが清末以降急に寺運が衰退し始めた。既に現在では、行宮も天主教會に占められ、境内の伽藍中早くも土阜と化したものもあれば、或は破軒傾柱風雨のさらすに任せ、荒廢の跡慘として目をそむけしむる個所すら見える。

石橋を渡ると山門がある。山門内には四天王を安置して居た。さして舊い塑ではないが、出來ばえは佳作の部に屬しよう。天井を仰ぐと屋根が拔けて直接光が射し込んで來る。軒下の木組を見ると斗栱には古式なものと清式のものとが雜用されて居た。これは清代の木匠が重修の際古い斗栱の構造を理解して居なかつた爲とも解される。甬道を進むと左右に鐘樓・鼓樓址が存し、正面には土阜があつた。此の土阜が宋の元豐年間建立したと傳ふる大覺六師殿址だ。小山の樣な盛土を一見すると支那建築に於て壁と屋根とに如何に多くの土を使用して居るか

が推測される。丁度此の時、參詣者に便利な樣にと土阜を掘開いて道を造つて居た。中央に當る部分からは一邊三米許りの八角形の須彌壇が掘り出されてあつた。此の壇は塼を以つて築かれて居た。但し用塼は無文で宋代のものと云ふ樣には解せられぬものだつた。土阜の北に當つてあるのが摩尼殿である(第二圖參照)。北京紫禁城の角樓に似た構造を持つて居た。屋根の大さに比較して柱の高さが低いので、個々の堂々たるには似ず、全體的には重苦しい建築であつた。縱橫各七間の殿身とも稱す可き四面に對し、各面一間宛の出張りのある入口が設けられて居た。殿身の屋根は入母屋重簷で、入口の屋根は破風の部分が正面に向つた所謂入母屋半藏とも名付く可きものであつた。簷下には木割の大きな二手先と稱し得可き斗栱が用ひられて居た。斜昂の切方は一見して直ちに宋金建築なることを肯かしめるに充分で、面白いことには柱間に組んだものは兩側の斜昂が外開となつて居て、私が所謂花斗栱と稱して居る式を示めし、柱頭のものは簡素で、隅柱の場合を除き外部には單栱單昂が現はれて居るのみだつた。つまり拙枋を缺いたものであつて、所謂遼式建築などに屢々見受けられる手法だつた。

殿内に入ると中央には三面を壁で圍んだ内陣を設け、それに須彌壇を造つてあつた。壇の高さは丁度一米あつた。壇上には釋迦如來を中心として二菩薩を配し、菩薩の蓮華座は八角形で、可成り損じては居たが、右側のものに象の形も猶殘り、それらが普賢と文殊とであることを示して居た。如來と菩薩の間には阿難と迦葉を配し、外側に當つて二天王を置き、更に如來の左右前には男女の供養者を侍立せしめて居た。此等は何れも塑像で、而も塑が粗に通ずる樣な劣作ではあつたが、配置の樣式は猶舊い姿を傳へて居た。内陣の内側の壁面は各々佛畫を以つてうづめられて居た。北面は如來の光背が邪魔となつてよく見えないが、東西の壁は大體同じ構圖を示し、上層部には坐佛群を、下層部には龍を描いて居た。尤も東壁の坐佛は都合十二體、西壁は八體を數へた。すゝけたり剝落したりしては居るが、曾ては像の傍に佛名の記された痕跡も見受けられた。外側の壁は東西二面が繪畫

で北面は塑作であつた。繪畫は共に淨土變を現はし、東壁の場合は中央に彌陀印を結んだ如來が坐し、兩脇に菩薩が侍坐して居る。此の三尊は蓮華池の中に設けられた月台上に安座して居た。月台には更に立〔二體〕座〔三體〕の小菩薩が居り、合掌供養の天人も居た。彼女等は總數三十餘名にのぼるので、其の全部が到底月台上に立ちきれず、從つて左右の階段まではみ出て居た。如來の光背からは五彩の光明が立ちのぼり、其の下には化佛が現はされ、又脇侍二菩薩の外側には各々一體の天王が立ち、其の下部には羅漢の群像や諸樂天が描かれてあつた。猶壁の左端には佛傳圖らしいものが見えたが、其の示めすところは明白でない。蓋し、此の圖は彌陀淨土の變相を現はして居るのではあるまいかと考へられるものであつた。西壁の構圖も大體前者と似たものであつた。但し本尊は手に御鉢の樣なものを持ち、東壁の台座が四角形の須彌座であるのに對し、これは八角形であつた。如來と菩薩の間には阿難迦葉も居た。上層部には左右二體の天部、卽ち四天王を配し、更に外邊に當つて菩薩及び天人

の群像を現はして居た。東壁に比較するとくすぶり方もひどく、下段は剝落した部分が尠くなかつた。實は此の兩壁畫の壁面、彩色、筆法の示めすところ必ずしも舊いものの樣には感ぜられなかつた。然し剝落した畫面をよく注意して見ると舊描の痕跡もあり、これによつて累次？の重繪があると解せられるのであつた。然し其の構圖に於ては恐らく當初の面影を多分に傳へて居る樣に思はれ、摩尼殿建築年代の決定と共に當代の淨土變相の一例を窺はれるものとして尠なからぬ興味を覺えしめた。北壁は塑を以つて峨々たる峻嶮を作り、中央に半伽の觀音を安置し、其の四面には龍虎獅象等の猛獸を現はして、其の樣恰も觀音を苦めんとするかの狀を示めすものであつた。山の他には海を現して居ると思はれるところもあつた。海水は龍に依つて吐出され、波浪が高くうねつて居る。更に海上には白雲が立ち、雲上には天部が据して觀音を守護するかに見える。或は男女の供養者がありはるかに此の狀を望んで居る。此の塑は觀音の廣大なる功德を示めすものであるが、果して當初から斯の如きもの

が存したか否かに就いては明白ではなかつた。

猶、繪畫は曾て殿内の諸壁面を悉くうづめて居たらしいが、今は損じて無い部分が多かつた。尤も一部分には殿閣人物等を描いた所も殘つて居た。然しこれは到底全體の構想を推測するに足るものではなかつた。出張りとなつて居る戸口の内側は廿四天を描いてあつた。これは一壁三體宛で、大悲尊天・鬼子母天・金剛尊天・日宮尊天・兜率陀天・大力尊天〔以上東口〕・龍王尊天・□馹尊天・羅睺尊天〔以上南口〕・月宮尊天・準提尊天・辨才尊天・功德尊天・威猛尊天〔以上西口〕等の説明も殘つて居た。此等の繪畫は時に割合勝れた筆法も看取されないではなかつたが、大抵は重繪の痕跡が認められるのものであつた。

摩尼殿を通り抜けると北に牌樓があり、それを過ぎると戒台に達する。蓋し、戒台の現存する寺院は支那でも比較的に尠い樣である。私の知る範圍では北京の雍和宮と西山の戒台寺及び五台山の碧山寺ぐらひなものである。未だ戒台寺の場合を見る機會を有しないが、隆興寺のものは他に比して規模が大きかつた。四注三簷五間四面の建築で、中に重層の石壇を設けてあつて、これに石階を架し、四方から登り得る樣にしてあつた。壇上には鑄銅同體二面の座佛が安置されて居た。此の佛像は背中を共にして前後に向ひ、各々異つた印相を示めして居る珍らしい姿のもので、それには眞定縣滹沱河南古城村發心善友呂氏諱旺謹造と刻した銘も讀み得た。年號は見えなかつたが、恐らく元明頃の作だと思はれる。戒壇には元來それを圍んだ廻廊があり、背後に韋陀殿が建つて居たのであるが、今は何れも壞れ、唯だ礎石のみを殘して居た。此處から進めば佛香閣に達する。佛香閣の前には左右に三簷重層の配殿が向合つて並んで居た。即ち轉輪藏殿と慈氏閣とだ。西に在るのが轉輪藏殿で、東に在るのが慈氏閣である。此の建築も摩尼殿の如く、一見して舊いものだと感じた。兩者は共に入母屋作りで、外觀頗る似て居たが、仔細に觀察すると大屋根を受ける斗栱の配用は必ずしも一致しては居なかつた。轉輪藏殿は轉輪藏を有する處から生じた名稱であり、内には今は

すつかり書架を失つた轉輪藏が茫然とした姿で存置してあつた。轉輪藏は私の既に見た範圍内では北京の智化寺、普度寺、及び五台山の塔院寺に存するが、各々其の構造に特色があつて、甚だ興味を惹いた。此の藏は上簷は圓椎形、下簷は八角で、それに複雜した斗栱を組み、藏身は八角、柱には捲龍等を施し、實際廻轉出來る構造であつた。而も書架が失はれ、其の爲却つて廻轉の構造が看取された。慈氏閣内には塑作の菩薩像が安置されて居た。高さ二丈五尺もあらう、すばらしく丈の高い佛樣だつた。近づいて拜するとそれ程の粗作でもない樣に思はれるものだつた。相好もふくよかで、いやみがなく、衣紋の手法などにも何處となく曾ての勝れた痕跡が認められた。光背は火焔を外圍とし唐草を内帶とした上部くびれの全光背で、恰も絲瓜形をしたものであつた。肩からは念珠が垂れ、それがひきずる程長い。但しこれは後世のもので、如何にもだらしなく感ぜられた。二體の脇侍は本尊に比して丈が頗る短く、丁度股の邊までしか達しない。而も三者は、近接し過ぎて立つて居るので、其の爲個個の均勢が必ずしも不調和と云ふ程度でないのに、全體の感じは徒にひよろ高く不安定であつた。閣内南側には大朝國師南無大士重修眞定府大龍興寺功德記を刻した碑が建つて居た。此の碑は蒙古憲宗時代に屬し、頗る珍しいものであつた。記中に丙辰秋王復令賜二白金一。重修二觀音大殿一。金二傅其像一云々とあつた。丙辰は卽ち憲宗の六年(一二五六)のことで王とは憲宗の沒後忽必烈と帝位を爭ひ和林で卽位した阿里不哥のことである。卽ちこれに依ると阿里不哥が銀を寄進して觀音大殿を重修し、觀音像に金箔をはつたことが窺はれるのであつた。而も觀音大殿と云ふは前後の文章から慈氏閣のことを指して居るらしく解せられた。果して然りとすると、これによつて慈氏閣が元の重修を經、此の像も亦元以前から存するものであることが知られる譯である。

大佛寺の俗稱が示めす樣に寺院の中心となつて居るのは言ふ迄もなく、佛香閣に安置された大悲觀世音菩薩に外ならない。(第三圖參照)前にも觸れた樣に此の佛像が鑄造されることゝ決つたのは開寶二年で、同四年愈々着工

の運びとなつたのである。鑄造に當つては、先づ塑土を以つて原型を作り、それに依つて第一に蓮華座、次に脚から膝に至る部分、更に臍輪、胸臆、腋以下の胴部、及び肩膊、頭頂に至る迄順次に鑄造し、これをつぎ合せていつたのであつた。像が全體鑄上ると布を以つて蔽ふことと一重、其の上に漆を塗り、最後に燦然たる金箔をつけたと云ふ。かくて完成したものが所謂、千手千眼、四十二臂、擧高七丈三尺の大立像で、其の相好の端嚴にして、威容の自在なる、比類稀なる御像だつた。葛蘂の撰した紹聖四年の眞定府龍興寺大悲閣記に依ると、

我太祖皇帝。撥二亂反一正於五季之後一。救レ民出二塗炭之苦一。與二菩薩度生之誓一。若レ合二符契一。與レ閣建レ像。作二大莊嚴一。皆欲福□□□□□人□□而歸於道。可レ謂二無心之化一矣。

と記して居る。(此の碑は慈氏閣の東側、乾隆庚午御詩碑の北に在る。前面に眞定府龍興寺鑄金銅像菩薩并蓋大悲閣序が刻され、裏面がそれである。明頃に後刻されたのであらう。然らば此の觀世音の鑄造は言ふ迄もなく、廣大無邊な其の慈悲心に依つて衆生一切の苦難を濟度せんとするにあり、太祖が建國の理想とする撥亂反正、民衆救濟の實際的な目的と合致する。還言するならば觀音の大悲と帝王の任務とは相表裏する譯で、此處に造像の意義は語らずして明かであつた。葛蘂の碑記には更に造像に關しての興味深い緣起が記されて居る。それに依ると鑄造用の銅は實は寺内の菜園から得、そして建築に用ひた材木は雨水に依つて五台山から流出したものだと云ふのだ。此の傳說の批判に就いては暫く保留することゝして、唯だ餘程有名な話であつた點だけを注意しよう。何時頃からかは知らず、五層閣就河漂木、七丈佛成地湧銅などゝ云ふ歌も作られたらしい。明の呂益は汴州で其の句を知つたと其の遊龍興寺勝概詩の序に記して居る。觀世音像が完成するとこれを安置す可き樓閣の建造が始つた。それが卽ち佛香閣である。蓋し、佛香閣は當初からの名稱ではない。それは元來大悲閣と呼ばれたもので、佛香とは實は康熙帝の命名に依るものであつた。又、天寧閣と稱したこともあつたらしく、正定府志卷二古蹟の

條には、

天寧閣。一名大悲閣。九間五層。高一百三十尺。中有二銅鑄觀音像一。高七十三尺。宋開寶四年建。

と記されて居る。若し此の閣が完好なるまゝに現存して居たならば恐らく支那屈指の建造物として數へられるものであつたに相違ない。

佛香閣に近づくと既に簷は落ちて、梁柱塑壁の殘骸見る目も痛々しい慘狀を呈して居た。然し乍ら今も中央の石造須彌壇に依然として觀世音は立つて居た。そして雨露をしのぐ爲に最近造られた御厨子の樣な建物がそれを蔽うて居た。見て居ると、參詣の善男善女が絶えず此の佛前で禮拜し、香煙は悠暢として漂ひ、何處からともなく梵鐘も聞えて來るのだつた。

此の觀世音は學高目測約六丈許りで、仰花重瓣の蓮華坐上に立つ御冠をつけ合掌し、着衣は全身を蔽うて居た。帶をしめ瓔珞を飾る等、衣紋は腰部が特に複雜さを示し、兩肘からは又、長く衣鰭が垂下つて居る。但しこれは木製であつた。蓮華座は直徑五米七〇高さ一米一〇

〔石座を加へる二米一〇〕あつた。蓮華は三重で、花瓣は十個乃至十一個よりなり、又上面には蓮實を現はして居た。須彌壇は平面凸字形を示し、高さ二米二〇で、其の側面には種々の彫刻が施してあつた。卽ち圭角には重瓣覆蓮華を刻し、下枋には間隔を置いて獅子頭を現はし、下梟には花唐草文を施し、更に腰束には樂天、束柱には花瓣人面を組合せたものゝ外、力士や捲龍を用ひ、猶上梟は重瓣の仰蓮華、上枋には人面・獸面・花文・嬪伽等を交互に刻してあつた。意匠は珍らしく手法は勁拔であつた。尤も後世の補修と考へられる部分もあるのではあつたが。偖て觀世音の御冠が近時の補修であることは一見明白だが、更に相好の如きも亦宋代の作と云ふには餘りにも拙劣であつた。傳ふる如くば元來は手も四十二臂あつた筈だが、今は僅かに二臂を有するのみで、而も其の手には力が不足して居る。猶、上半身も下半身に比較すると技法が劣る樣に考へられた。從つて腹部以下のみが恐らく原鑄の儘であらうと解せられる。蓋し、最初には觀音を中心として、尠くとも二體の脇侍が安置されて

居たであらう。須彌壇の廣さは當然かゝる推測を裏書するものであつた。此の他、金の永安三年眞定府龍興寺大悲金銅像寶閣記の上部に刻してある畫像も亦其の推測の誤りでないことを示して呉れた。此の碑板は今、方丈の南房に藏されて居るもので、記中には謹運二誠心一。命レ工刻レ石。取二本像一以模二其眞一。採二聖迹一以二其實一云々と記され、相當信用の置き得るものであることが知られるものである。固より仔細に瞻るならば相違點と解されるもあつて、必しもそれが忠實な摸寫だとは信じ難い。然し大略の構圖は推測し得る。更に私は此の畫像を見乍ら一つのことに思ひ付いた。それは熱河普寧寺の大乘閣即ち大閣にある木像に就いてだ。後者は乾隆時代の彫刻に屬し、清朝屈指の傑作として數えられる觀音像であるが、此の祖型は恐らく隆興寺の大悲閣のそれではなからうかと。大佛閣の七間五層であることや木像の擧高七丈二尺の說であることやがよく符合し、猶又脇侍が上記、永安三年の畫像とも類似して居るのである。偖て、一般に記錄では佛香閣が九楹五層高さ十三丈の建築であつたと云つて居る。然し礎石の示めすところ、實は正面七間深さ五間である。今も第一層東西北面の塑壁は痛ましい姿で殘存して居た。而もそれは明かに古式なものであることを示めして居る。されば、後世に於て、間數が變更される程の大改築を行つたとはどうしても考へられず、記錄の九楹說は信ずるに足らないと思はれた。

此の殘壁は內側に塑像群を作り、外側に繪畫を描いてあつた。塑像群は東西兩壁とも略々同じ樣な構想であつた。然し注意すると東壁は騎象の普賢菩薩を中心とし、西壁は騎獅の文殊菩薩を中心としたもので、これが左右には菩薩や天王や僧侶俗人が立ち竝び、其の多數は圓形の頭光背をつけて居た。猶これらの上層部分には殿閣〔東壁〕や多寶塔〔西壁〕を雲中に浮べ、其の間に飛天其の他を配し、間隙は波浪を以てうづめて居た。北壁は構圖の變化に乏しく、一律に千體佛で飾るのみであつた。蓋し三壁の塑像群は釘を以つて壁面に止めてあるのであつたが、雨水の爲漸次崩落しつゝあり、完好な部分は殆んどなく此の儘では到底長く保ち難く思はれるのであつ

た。崩落した部分を更に注意すると泥土の下にも、青綠のまさつた彩色畫があり、樓屋や人物が窺れた。思ふに塑像群の技法は頗る巧みなので、其の製作が宋代のものであると考へられたのであるが、下層に彩色畫があるところを察すると、此の塑像群は尠くとも宋初の塑とは決め難く思はれた。然しだからと云つて製作年代を明清にまで引き下げ得るものではない。明清時代になるとどうしてもこれだけの塑は出來難い佳作たるを示して居た。塑壁の外側を一巡すると北壁は破損して何物も窺はれなかつたが、西壁には不動明王、孔雀明王、執金剛、菩薩、文武人及び合掌供養者等が描かれて居た。これらは清朝の彩描で別に勝れて居るとも感じられなかつたが、表面の繪畫が剝落した後の部分には人物樓閣山水等の殘存するところがあつた。更に不動明王の足の邊を見ると剝落した下から舊描の足が現はれて居た。これは藍色を以つて現はされた、白描式とも名付く可き手法のもので、蓮華の台座の上にぐつとかがとを托し、足裏を外側に向けた圖であつた。簡潔雄勁、其驚嘆す可き筆力の前に我を忘れて佇たずまざるを得ぬ程であつた。蓋し此の塑壁も亦幾度かの重繪が行はれたものであらう。自分には尠くとも宋のものと明頃のものと清代のものとの三次の布彩があると解されるのであつた。東壁も表面は大體西壁と似た構圖の清畫であつた。但し此の方の剝落は上記の樣な下層の興味を殆んど示めしては居なかつた。壁の構築法を注意すると、下部には煉瓦を積み、上には土塼を重ね、而も其の境目には材木を横たへて、所謂防輪裝置をしてあつた。これは云ふまでもなく現存の支那古建築に普通な手法である。

佛香閣の兩翼をなして居るのが御書樓と集慶閣で、各々三簷二層であつた。就中、集慶閣の方は相當の荒廢振りを示して居た。佛香閣を過ぎて後庭に出ると、其處にも又、南面した一層の殿堂が建ち、甬道を以つて前者と連らなつて居た。これが彌陀殿・藥師殿・淨業堂であつた。彌陀殿の本尊の背後には四體の觀音が立つて居り、特に東側の千手觀音は鑄銅で、均勢のとれた古雅な作品として目を惹いた。

正定府志には隆興寺の行宮圖が載つて居る。此の圖に依ると、佛香閣の後方に猶三層の建築があることになつて居る。然し現狀から推すと三層と云ふのは疑問であつた。其の後偶然にも北京東方文化總委員會所藏五台山行宮圖式中に隆興寺の平面圖を發見することが出來、これを見るに矢張り一層となつて居る。然らば現狀の示す通り最初から一層だつたのであらうと解せられた。